あげ・こげ・じげじまん

第9回　私たちの愛した根雨高女

2020年に創立100周年を迎える日野高校。その前身として誕生したのが、日野郡立日野農林学校と根雨町立実科高等女学校（根雨高女）でした。

今回は、根雨高女の卒業生である、植木正枝さん（根雨）と川上文子さん（根雨）に、根雨高女時代の思い出話を中心に、当時の様子などを聞きました。

円形の正面玄関が印象的な根雨町立実科高等女学校（現在のオシドリ観察小屋付近）

寄宿舎の窓から顔をのぞかせる女学生たち

根雨高女に入るまでと小学校時代の思い出

―2人の生まれた年と根雨高女に入学するまでの話を聞かせてください。

植木・川上　大正13年生まれで、私たち誕生月も同じ1月なんです。

川上　私は両親が広島にいたので、広島で生まれ小学校に入学する前に根雨に移ってきました。

植木　私は生まれも育ちも根雨です。その後、根雨の尋常小学校に入学しました。ちょうど今の役場の場所にあり、同級生は55人いました。

川上　当時は、お手玉や折り紙、編み物をして遊んでいました。お手玉のことは〝おじゃみ〟と言っていたんですよ。小学校時代の思い出は、10人ぐらいで松江の放送局に行って歌を歌ったことですね。

植木　私の思い出は、小学校3年生の時、「将来の希望」というテーマで作文に、「宝塚に入りたい」と書いたら、大騒ぎに。校長先生が私の父を訪ね、宝塚に行くのをやめるよう説得されました。それ以来、当時、宝塚歌劇団生徒だった根雨出身の吉原たか子さん（芸名：花木ほまれ）が夏休みで帰省されたときに、父に内緒で宝塚の様子などを聞きに行ったものです。

▲根雨高女の卒業アルバムを見ながら思い出話に花を咲かせる、川上さん（左）と植木さん

思い起こすは楽しい記憶 懐かしき根雨高女時代

―では、根雨高女での学校生活の様子、思い出などを教えてください。

川上　私たちが入学した時は、根雨から12人が入学し全部で49人いました。高等女学校は、今の中学1年生から高校1年生までに当たります。当時は、円形の正面玄関でとてもすてきな校舎でした。まだその頃は戦争の影もなく平穏な日々を過ごしていましたね。英語の授業もありましたし。

植木　私が印象に残っているのは、理科の先生ですね。ほかの先生が皆、はかまや着物姿だったのに対し、理科の先生だけ洋装でした。理科の授業も魅力的で、父に「将来は理科の先生になりたい」とよく言っていたものです。

―部活やサークル活動のようなものはありましたか。

川上　バレーや卓球、ピアノなどさまざまな部活がありました。

植木　私は最初、卓球とピアノを習っていたのですが、卓球をした後にピアノの先生の所に行くと、先生が「植木さん、また卓球してきましたね」と言われるんです。どうして分かるんだろうと思い理由を聞くと、卓球をすると手が震えるんだそうです。それで、「卓球はもうやめてください」と言われてしまいました。

▲学芸会（昭和14年ごろ）で軍艦マーチを披露。入学後、戦争の影が忍び寄り、その影響が色濃くうかがえる（左が川上さん、中央に植木さん）

川上　私もその話を聞き、ピアノをやめバレーに専念することにしたんですよ。部活や授業などもそうですが、とにかく楽しい学校生活でした。

―そのほか、印象に残っていることはありますか。

川上　女学校というと、当時は花嫁修業の場だったので、お茶や生け花のほか、掛け軸のかけ方などいろいろな作法の授業がありました。「良いお嫁さんになるように」といった具合で、卒業後は結婚される方が多かったですね。

また、身だしなみなど校則も厳しかったんです。スカート丈は床上30㌢と決まっていて、朝礼の時によく出口で見られていました。

植木　おしゃれを楽しみたい年頃でしたから、友人と一緒に上着の脇をつめて、スカート丈も少々長くしていたのですが、すぐ先生に見つかってしまいましたね。でも、先生が「バランスがとれているからまぁいいでしょ」と言っておとがめなしになったんです。

川上　だって植木さんは宝塚に行きたいと言っていたくらいだから、おしゃれでスタイルも良かったんです。今ではとても良い思い出です。

それぞれが歩んだ卒業後 人生を楽しく過ごすには

―卒業後の様子を教えてください。

川上　私は卒業後、根雨に残りましたが、ある時、農協の連合会の仕事を手伝うことに。はじめは10日くらいの予定で軽い気持ちで始めたのですが、結婚して子どもも生まれても続き、結局定年まで勤めあげてしまいました。

定年後は、料理を習おうと思い料理教室に通いました。そうしたところ、当時まだなかった食生活改善推進協議会の立ち上げにかかわることに。食習慣など環境が大きく変わる中で、さまざまな活動をしてきました。その活動は現在も続けており、昨年には全国名誉会員賞までいただきました。

そのほか、日野町俳句同好会（現在は解散）や書道グループの活動、コーラス、健康ストレッチなどを仲間たちと楽しんでいます。

―次は、植木さんの様子を教えてください。

植木　私は卒業後、東京で2年ほど教職に就き、終戦直前の昭和20年、根雨に戻り日野産業高等学校で教師をしていました。その教職も結婚を機に退職、家が酒店を営んでいたことから、商工会の人に誘われ入会することに。商工会の女性部長や県の副会長、県婦連会長、全国副会長などをさせてもらい、いろいろな人と出会い多くのことを学びました。今の私があるのは商工会での活動のおかげです。

また、家の酒店では当時、〝たちきゅう〟もしていました。根雨駅の駅長や総合事務所の所長、高校の先生などが多く集まり〝植木大学〟と呼ばれ、話題も豊かで私もたくさんの知識をもらいました。

―植木さんはそのほか、書道や絵画などもされていますよね。

植木　東京へ旅立つ私に父が「財産はいくらあっても使えばなくなる。しかし、身に付けた教養は自分の一生ものだからしっかり勉強してきなさい」と送り出してくれました。その言葉のおかげで、書道や絵画、大正琴など今でも続けています。最近では二胡の演奏も始めましたし、私の財産となっています。

―最後に、今のまちの様子などをみて、若い世代に伝えたいことはありますか。

植木・川上　まちなかでも空き家が目立つようになり寂しい思いです。若い人たちには町に残り、共に伝統や特色を生かしながら町を元気にしてほしいと願っています。

「じげじまん」の語り手を募集しています

昔の行事や地域のしきたり、田植え歌やわらべ唄などを語っていただける人があれば伺います。伺った内容は、町広報紙に掲載するほか、録音や録画して保存します。若い世代に話を語り継いでいきませんか。詳しくは町図書館（電話72－1300）まで。